

# キルギス族英雄叙事詩「マナス」第一部（一）

著者	西脇 隆夫
雑誌名	名古屋学院大学論集 言語・文化篇
巻	22
号	2
ページ	98-112
発行年	2011-03-31
URL	<a href="http://doi.org/10.15012/00000729">http://doi.org/10.15012/00000729</a>

〔翻訳〕

キルギス族英雄叙事詩「マナス」第一部（一）

西脇隆夫 訳

凡例

一 この翻訳は、中国キルギス族の大マナスチ（英雄叙事詩「マナス」の語り手）として有名なジュスプ・ママイが語ったテキストにもとづく、アディル・ジュマトウルデイの漢語訳『瑪納斯第一部』（新疆人民出版社 二〇〇九年）によって訳出したものである。

二 今回は、同書巻一の「序詩」、「四十部落的伝説」と「高山牧人的伝奇」の部分を訳出した。

三 また、訳出にあたっては次の資料を参考にした。

1. 『瑪納斯 第一部第一冊』新疆人民出版社 一九八四年 キルギス語版

2. 『瑪納斯 第一部上巻』新疆人民出版社 一九九一年 劉発俊等漢語訳

3. 『瑪納斯』新疆人民出版社 二〇〇四年 キルギス語版

4. 『マナス 瑪納斯 第一部』二〇〇〇年 胡振華、西脇隆夫 訳

四 注は漢語訳に付けられているものだけを付した。

序 詩

エ……エ……エ……イ

英雄マナスを語ろう

願わくばその魂のご加護によって  
感動を与え、正しく詠わんことを。

半ば真、半ば偽り

誰が彼らと一緒だったのだろうか  
偽りだろうと真だろうとかまわない

高らかに詠いさえすれば

誰もがきっと心地よくなるだろう

いずれが真か、いずれが偽りか

誰もその目で見た者はいない

輝く月が天上にかかっていれば

欠けていても満ちていても追うまでもない

詠い始めれば私の激情は高まり

聞き手たちの心をかき立てるだろう

これは祖先が残した物語

我らはどうして詠わずにいられよう

これは先人が残した遺産

今日まで代々伝えられてきたのだ

もしもこの英雄の賛歌を詠わなければ

どうやってわが心の憂いを解けるだろうか？

先人の英雄の物語を語りさえすれば

美しい詩句が湧きあがることだろう

今こそ詠わないで、いつまで待つのか？

矢はもう弓の弦にかけられ

駿馬ははや銀の鞍を付けて

この世で最も美しい言葉で

私に歌声を流させてくれ

それは我らが祖先の残した言葉

それはすべてに勝つ英雄の言葉

それは喻えられない雄大な言葉

それは賑やかで味わいのある言葉

それは我らが祖先の造った最高の言葉

それは後人が伝える優美な言葉

それは種のように増えていく言葉

それは人々が敬い慕う言葉

それは我らが代々伝える言葉

それは我らがそれぞれ受け継ぐ言葉

それは先人が語った言葉

それは後人が絶えず伝承する言葉

それはこの世で最も美しい言葉

それは世界で最も壮麗で輝かしい言葉

どれだけの世紀が経とうとも

それはすべて我らと生死を共にする言葉

それは淀みなく綿綿と続く言葉

それは世界と共に生存する言葉

それは宇宙を超越する偉大な言葉

それは太陽よりも輝かしい言葉

それは月よりも明るい言葉

その時代から今日まで

どれだけの年代を生きてきたのか

どれだけの歳月が流れたのか

巨象に跨った勇士が消え去り

腕力が抜群の英雄がいなくなり

人々から永遠に偲ばれる英雄

マナスのような雄獅子は

ずっと現れなかった

その時代から今日まで

高山は崩れて平地になり

峰は溶けて塵となり

大地が亀裂して河川となり

谷は枯れて荒野となっても

マナスのような英雄は

ずっと現れなかった

荒地は湖となり、湖は桑田となり

丘陵は溝となり、雪の峰が顔を変えても

英雄マナスの物語は一代また一代と伝えられた

雄獅子マナスの物語は

人々と苦楽を共にして切っても切れない

それは凶暴な嵐の怒鳴り声

それは美しいヒバリの歌声

それははっきりした雷の音

それは動き回る巨竜の威厳

それは湧きかえる洪水の荒波

それは耳をつんざく叫び声

それは天空を切り裂く雷鳴

それは蜜や美酒のような言葉

それは歌手が集めて尽きない言葉

それは多くの馬が跳びはねる言葉

それは優勝を勝ちとる言葉

それは最高峰を越える言葉

それは天空を飛び

五色の雲が追えない言葉

それは大海を越え

暴風も吹き散らせない言葉

それは胸の前にかかり

詩歌のように真珠のような言葉

それは歌の海を流れ

波の荒れ狂う言葉

それは霜を溶かすことができ

それは人々の心の扉を開ける言葉

それは絶えず高い峰に向かい

すべての困難を圧倒する言葉

この物語の中には

魔術が多く、巨人が多く

言い尽くせない習わしが多く

誇張と虚構の内容が多い

どうかじっくり聞きたまえ

金が多く、銀が多く

馬を疾走させる戦いが多く

耐えられない苦難が多く

ぞっとするような蹂躪が多い。

突き刺されて大地に倒れた勇士が多く

矢も透さない戦士の服が多く

風よりも速い駿馬が多く

高山のように頑丈な英雄が多い

矢を噛み切る誓いが多く

しばしば変化する詭計が多く

枝を折って誓うしきたりが多く<sup>①</sup>

人にはっきり言わせることができない

不思議な形の武器が多い

智者が多く、手本が多く

教訓が多く、笑話が多く

占い師が多く、預言者が多く

賢者が多く、策士が多く

天下を縦横にする名士が多い

天然をしのぐ技術の巧みな職人が多く

仙女の中から娶って来た嫁が多い

計り知れない巫術が多く

永遠に死なない人が多く

金銀で飾られた鳥獣が多い

夜鶯のように美しく

心地よい声の歌手が多い

この世では治められない

地上に財宝は無数にある

川の州に敷き詰められた砂粒のように

言い尽くせない事が多い

キルギス人が代々珍藏するのは

この無敵の英雄の物語

五十年のあいだ大地が顔を変えようと

百年のあいだこの世が変わろうと

この無敵の英雄の物語は

聞けば聞くほど聞きたくなり

聞けば聞くほど新鮮となる

多くの世紀が過ぎ去り

古代の英雄の物語は

今までいくら聞いても聞きあきない

我らはしばらく本題にもどり

英雄マナスの物語を

一代ごと高らかに語ろう

#### 四十部落の伝説

エ……エ……エ

古い伝説を詠い語り伝えるためには

年寄りに詳しく尋ねなければならない  
はるか昔の年代に東北の方向に

エニセイというところがあったそうだ

谷間には緑樹が青々と茂って木陰を作り  
山には豊かな牧草が風に吹かれている

人々は種をまき耕して豊作を望み

少しばかりの労働で豊作となり

かまどや倉庫には米が満ちている

四方をさすらう旅人は

この美しいところを懐かしむ

そこでは、貧乏人と金持ちが分け隔てなく

そこでは、衣食は満ち足りて人々は増える

エニセイの人々を治めるのは

カルママイ汗王

彼が汗王になると

「カルママイ」の名は人々に忘れられ

「汗王ママイ」の英名が四方に響きわたった

ママイ汗王は真の英雄

彼は公平に取りさばき、人々に称えられる

同時代の人の中で

誰も彼と肩を並べられる者はいない

広々としたエニセイの大地を

誰も犯そうという度胸はなかった

時は一年また一年と過ぎ去り

この人口は増え、年ごとに繁栄する

移ってきた人も絶えず多くなり

四十の部落連盟がここに出現した

汗王ママイは連盟に名を付けて

「クルクジュズ」と呼んだ<sup>(2)</sup>

彼は四十の部落の人々を治め

在位は四十年に達した

人々は安らかに暮らし仕事を楽しみ

これまで外部からの侵略がなかった

四十年のあいだ隣国と睦まじく

物は多く民は豊かで、暮らしはすばらしかった

汗王ママイには五人の妻妾がいて

一人も子どもを生まなかった

子どものたくさんいる寡婦は

長らく一人でもその容貌は衰えない

「あの女がわが子を生むかもしれない！」

ハン・ママイは彼女と結婚した

子どもはとても可愛く育った

ボタノが九歳になった時

青いたてがみの狼のようすを表し

体つきは大きくたいそうたくましかった

この呪わしい世界は

その虚偽と真実を誰も予見できない

病魔は汗王ママイに付きまとい

毎日忍びがたい苦痛に、彼は絶えず呻いていた

生命の大樹はぐらぐらして倒れそうになり

高い山が急に崩れるように

汗王ママイはこの世を離れた

人々は葬儀を行って汗王を見送り

四十の部落の人々は

つぎつぎとやって来て一か所に集まった

白ひげの揺れ動く長者

人より才智のすぐれた聖賢

みんなは牛の角状に囲んで坐り

衆知を集めこれからのことを相談した

人々はボドノを招いて

彼をみんなの真ん中に坐らせた

ジャルタイバスという人は

弁舌が人並みすぐれ、口がうまかった

「この場に在るみなさんに

私の意見を申し上げたい

汗王ママイの一人っ子

尊敬するボドノ王子よ

私の意見をまじめに聞いてほしい」

「汗王ママイは英明な汗王

彼はこのうえなくたくましく、恐れを知らず勇敢

遠くを見通し、先のことを深く考えたことで

人々に敬われ称えられている

どのように強大な敵であろうとも

我らのところに攻めよせようとはしない」

「汗王ママイの時代に

激しく流れるエニセイ河の畔に

我らは四十の部落を結成した

エニセイ河の両岸は果てしなく広い

春の花が秋に実を結び、豊作は毎年」

「群れをなす羊は山野に満ちあふれ

家の前後でぶらぶらしている

牛は群れをなして川のほとりで自由に歩きまわっている  
馬は山で思いっきり跳びはねている」

「こぶが二つある駱駝は

川の州を自由にそぞろ歩いている

四畜は草原に満ち<sup>3)</sup>

人々は衣食が足り、生活が豊かで楽しく働いている

遠方をさすらう人々はつぎつぎとやって来て

四十の部落は一堂に会して駐屯する

人口は増え、家畜は繁殖して

四十の部落にはそれぞれ四千人がいた」

『おまえたち、敵に勝ち、故郷を守らねばならぬ!』

四十部落のクルクジュズは

ママイによって『クルグズ（キルギス）』と名づけられ  
それから始まって今日に至った」

「四十の部落という『クルクジュズ』、

『クルグズ（キルギス）』の名が全世界に広まった」

「今では英名のある汗王はすでにこの世を去り、

汗王ママイの一人っ子

ボドノはすでに成人し

我らは当然彼を可汗に推すべきだ」

「みんなもこのような道理は分かっているだろう

山犬や狼を捕える雄鷹は

決して腐った肉を食べることなく

狐を捕えて味わおうとする」

「我らはその父王を尊敬するように

彼を推戴し、補佐して育てる

彼に汗王の重責を担って

我らを導く羊になってもらおう」

「汗王ママイはもはや亡くなったけれども

自分の乗馬にできるものを作ることなく

敵に米一粒も奪わられることがなく

人々は少しも痛めつけられることもなかった」

「我らの公正なママイ汗王は

理由なく鞭を振り上げることなく

人々を罵り責めることもなかった

我らに幸せで安らかな生活を授け

我らは子馬のように草原ではしゃぎまわった」



「平原で作物は風のままに揺らぎ

山腹では家畜が自由に歩きまわっている

汗王ママイの恵みは天にも等しく

人々は幸せな時を楽しく過ごした

このような汗王を忘れることができようか？

誰がその息子と王位を争うだろうか？」

ジャルタイバスの言葉には真心がこもり

直言してはばからず、深い思いがこめられていた

キルギス人はそれを聞いて心から承服し

すぐさまボドノを真ん中に囲んで

彼を新しい汗王に押しいただいた

ボドノは汗王の使命を果たし始め

人々を治めてたいそう声望があった

人々の生活はいっそう裕福となり

キルギス人はますます楽しくなった

ボドノは大地を遍く照らす明月のように

なすことすべて当を得て、なにごともし順調だった

人々は輝かしい道を進み

敵の生きる道は狭まって希望を失った

きちんと秩序だって人々を治める汗王だった

ボドノも最後にはこの世を離れ

残念なことに数年しか汗王でなかった

ボドノの子ボトイは

甘やかされて育った息子だった

ひどく溺愛された子どもは

人々の頼りや希望にはなれない

こうして幸せの星は落ちて

キルギス人は砂鷄のように苦難をなめた

またたく間に、十五代が過ぎ去り

キルギス人の暮らしには苦難が満ちていた

体質は下降し、人口は減り

故郷を離れて、落ち着けるところもなかった

数世紀も苦しみをなめて

ようやく苦境を脱し始めた

人々は四方に問い合わせ、各地を訪ねて

しばしば集まり、互いに話し合い

ボドノの子孫の中から

ボヨンという男子を選び出した

彼に汗王の旗を担がせ

王位に昇り、人々を治めてもらった

これからボヨン汗王の英名が四方にとどろいた

ボヤン汗王の後はチャヤン汗王

チャヤン汗王の後はカラ汗王

カラ汗王の後は絶えず増えて

最後には勇猛なオロズドゥ汗だった

英雄オロズドゥは人々のあいだで大きくなり

金剛のように烈火の中で鍛えられた

人々は意気揚々として、手足を伸ばし

他民族の者と対等にふるまった

四畜は速やかに増加し、山には牛、羊、駱駝が満ちあふれた

英雄は四方を歩きまわって夫人を選び

五人の妻を天幕に迎え

指拔きのように小さな口の美人はいずれも美しかった

「オロズドゥの五人の美人」

このような話が人々のあいだに伝わった

オロズドゥの第一夫人は

ジャケップとシガイを生んだ

第二夫人は

カタガンとカトカランを生んだ

第三夫人が産んだ子は

ジャムグルチとバルタ

第四夫人は

カシエトとカルカ

最も若い妻が生んだのは

テケチとクズルタイ

オロズドゥの十人の子は

それぞれ五人の妻が育てた

その功績が偉大な英雄オロズドゥは

ずっとエニセイ河の両岸を治めていた

カラキタイとカルマックは<sup>(4)</sup>

これまで彼を屈服し投降させられなかった

敵はその威光に恐れ

これまでその村を犯そうとしなかった

オロズドゥが治めていた時期は

すばらしい黄金の日々だった

なにもかも思うがままで、災害に遭わなかった

家畜は殖え、人々は多くなり

人口は急に九万戸まで増えた

財産は年ごとに増加し

暮らしは豊かになり、心地よい気分になった

その頃十人の金持ちが現れ

広大な土地、無数の牛と羊を持っていた

どうか彼らの名を聞いてもらおう

どの人の名もありふれていない  
アドバイ、コルバイ、タシバイ  
彼らの財産は数えることもできない  
自分の領地を広げようと企んで  
ブカラの方に移って行った

クレタンとエルアマンは  
その財産が一番多かった  
アラケ、ケンディルバイ、キュロンコ  
それにコチコルとキプチャク  
彼らの獵犬は油などに目もくれず  
彼らはいずれも有名な金持ちだった

その頃のキルギス人は  
どの人も富裕で、勢いよく発展していた  
世の人は誰もキルギス人を軽んぜず  
誰もキルギスに侵入しようとはしなかった

飲み物は香りのよい馬乳と銘茶  
人々は毎日油をたしなみ  
昼の食事は  
乳を飲んでいた子駱駝の肉<sup>(5)</sup>  
夕方の食事は  
身ごもっていない雌馬の肉<sup>(6)</sup>

キルギス人の生活はこのうえなく幸せだった  
自由で気まま、なにも心配することがなかった

山へアルガリを狩りに行き  
谷間に雌のアルガリを捕え  
山で雄のアルガリは  
キルギス人の手から逃れられない

崖下の狐は逃れることもできず  
砂地の兔は四方に逃げまわり  
ハイタカを放して追いかける  
ハヤブサを放して白鳥を捕えさせ  
川の洲でカモとガチョウを追いかける

魚捕りの網を張って、釣り針をしかけ  
肥えた魚を捕える  
澄んだ川の畔では  
大量のビーバーとイタチを捕える

涼しい時に「王宮攻め」の遊びをし<sup>(7)</sup>  
馬上での相撲と羊追いの競技をする  
子馬を屠殺し、「シルネ」の集会に参加し<sup>(8)</sup>  
蜂蜜を馬乳にまぜると、香りが漂う  
「テケテルミシ」と「コルブカ」<sup>(9)</sup>

それに綱引きの競技を  
食べながら見物する

人々が集まるところでは

夜に天幕を出ると

どの天幕のそばにも

すべて大型のかまどが作られていて

鍋の中の生肉が魅力的な香りを漂わせている

天幕は不ぞろいに並んでいて

遠方からの来客に心をこめてもてなした

音をたてお茶を煮ると、茶と肉の香りが四方に漂い

食事用の敷布の上にご馳走が並べられた

「でこぼこの山道」という曲が

コムーズの音とともに漂う<sup>(11)</sup>

歌手たちは歌声を張りあげ

ヒバリの鳴き声のように伝わって来る

十本の指と鼻を組み合わせて

十一の音符を同時に演奏し

演奏者がまちがえればすぐに退場し

優勝者は手厚いほうびをもらえる

娘や嫁たちはくしで髪をととのえ

魅力的な口琴をかき鳴らし<sup>(12)</sup>

その優美で美しい旋律は

人々を夢のような景勝地に連れて行く

婦人たちは美しい絨毯を織り<sup>(13)</sup>

壁掛けの刺繍はともあでやかで美しい

オオヤマネコや虎や狼の皮の外套は

もっぱら老人たちの肩にかけられる

老人は上座にきちんと坐り

オンドルには柔らかな熊皮の敷物が敷かれる

娘たちの帽子の先には羽毛が挿され

婦人たちの首飾りはキラキラと金色に光り

若者は金の腰帯を締め

腰帯には短剣を付けている

山には四畜が走り

山野じゅう見張れない

移動の時には雄の駱駝に天幕を載せて

五色の絨毯で荷物の上を覆う

人々は互いに自分の名誉を競うために

さまざまな飾りは一軒ごとに立派だった

美玉と金、銀、銅など貴重な金属が

すべて馬の鞍飾りに使われる

友人と契りを結び絹の服と外套を着て

駿馬を贈って記念とする

老いも若きも互いに敬い

伝統の美德が人生の規範となった

娘たちと若者たちは一か所に集まり

心を打つ恋歌が月光の下で響きわたり

六本の高い柱で作ったぶらんこは

まるで天上の星に触れるようだ

娘をやり嫁をもらうことが続き

揺りかごの儀式も大いに催し<sup>13</sup>

三歳馬に乗って競争すれば

勝者への賞品はかなり手厚い

人々はガヤガヤ、ペチャクチャと騒ぎ

葬式があり、祭典を催した

五人が一組になって

それぞれ天幕の主人が世話をし

子馬、子駱駝と羊の子を屠殺し

羊の頭と尾っぱを客人の前に並べる

羊追いの競争と馬上の相撲は

天地を揺るがすように人々の心を揺さぶる

雄々しい勇士は馬上で闘い

雷鳴と稲光のように刀と槍がぶつかり合う

射手は弓を引いて矢を放ち

高い竿に小判を付けた細縄を射る

人々は思いっきり楽しみ、喜びに満ちあふれ

暮らしには不安もなく、心地よくのんびりしている

これこそがキルギス人の豊かな年月

嫁たちは乳の皮さえも味わおうとせず

老女は羊の尾の油にも目をくれようとせず

このように一年ごとに幸せで安らかだった

### 高山の牧畜民の物語

我らが遠い祖先はオグズ汗

しだいに発展して、代々伝わってきた

それから今日までずっと

代々いずれも汗王が出現した

その中に一人の英雄がいて

カラシがその本名だった

その顔は満月のように光り輝き

彼のような英雄はこの世で見つけにくい

あばたの人を目にさえすれば

彼はことごとく殺して容赦しなかった

彼には息子が一人いて

美しい顔で、わずか四歳だった

ある時、急に天然痘にかかり

子どもの顔はすっかり壊れ

美しい顔があばたに変わった

カラシ汗は自分の宰相と大臣を集めて

彼らに自分の本心を話した

「家臣の中にあばたがいれば

わしは彼らを生かしておかなかった

自分の息子があばたになるなんて

こんなことが起きるとは思いもよらなかった」

「もしもあの子を生かしておけば

これまでの命令に背いてしまう

こっそりあの子を育てるよりも

すぐさまみんなの前で首を切るほうがまだ」

「このためにわしはおまえたちの意見を求め

一人っ子という身分を考えなくてもよい」

汗王はすでに思いきって決心し

自分の一人っ子の命を奪おうとした

大臣はみな互いに顔を見合わせていると

聡明な宰相が立ち上がって

慌てて自分の意見を述べた

「あなたさまが下した命令ならば

私どもはお言いつけどおりにいたしましょう

けれどもこれはあなたのひとり息子

どうして斬殺の命令を下されるのでしょうか？」

「もしも子どもがワーワー泣けば

どうしても気にせずにはいられない

ご自分の命令を変えられないのでしたら

あの子を殺さなければなりません

どうか随従と私を同行させてください

私は荒野の中で私の使命を果たして

彼のために石でお墓を作りましょう

そこで子どもは宰相が処理することになり

宰相はそのはかりごとどおりにとり行った

彼は一群の少年少女を集め

王子とこれらの子どもたちを連れて

人里離れた深山までやって来た」

「おまえたち二度と故郷にもどってはならぬ  
おまえたちを『クルケズ』と名づけよう<sup>④</sup>」

そう言い終わると、これらの子どもをすべて追放した

少年少女たちは深山に向かい

彼らは背たけも同じではなく

年齢も互いに異なっていた

男女は自由に連れ添い

彼らの新しい人生を始めた

カラシ汗王の王子は美しい娘を娶り

りりしい息子を一人生んだ

彼らは人跡まれな深山で暮らし

ふさわしい言葉が見つからないので

子どもにボヨンという名を付けた

ボヨンの子孫がチャヤン

チャヤンの後にカラハンが受け継いだ

カラハンの後のクルグズ（キルギス）人は

多くの支族がしだいに増えてできあがった

カラハンの子はオロズドゥ

彼はこの世でめったにいない英雄だった

その配下は九万戸を超える人々

これまでカルマックのチンギシに降伏したことがない

彼はエニセイ地方を統率し

カルマックに対抗した

五人の妻は十人の子どもを生み

人は「オロズドゥの十人の英雄」と呼んだ

民間の言い伝えが四方に流れ

ジャケップ、シガイは実の兄弟

彼らはオロズドゥの第一夫人が生んだ

カタランとカトカランは

オロズドゥの第二夫人が生んだ

第三夫人が生んだ子どもは

ジャムグルチとバルタ

カシエトとカルカは第四夫人が生んだ

第五夫人が生んだ子どもは

テケチとクズルタイ

オロズドゥの十人の息子は

父が同じ異母兄弟

それぞれ五人の妻が生んだ

このようなことは確かに不思議だった

この世は複雑で、どうなるか分からない

この一節の話はしばらくこのままにして

カルマックの首領アローケが

キルギスに侵入したことを語ろう

## 注

- (1) 枝を折って誓う キルギス人が誓いをたてる時、しばしば柳の枝を折って誓う。もしも誓いに背くと、柳の枝のように折られることになる。
- (2) クルクジユズ キルギス語で、四十の部落という意。これはキルギス族の起源伝説にもとづいている。
- (3) 四畜 キルギス人は、馬、牛、羊、駱駝を「四畜」と呼んでいる。
- (4) カラキタイ「カラ」の原意は黒色。「キタイ」は「契丹」のこと。キルギス人は色彩で方角を指し、黒色は北方を代表し、カラキタイとは「北方の契丹」のこと。
- カルマック 民族名。モンゴル族のカルマック部を指し、残った人の意味となる。またワラ（瓦剌）部とも称す。
- (5) 乳を飲んでいた子駱駝の肉 キルギス人は乳を飲んでいる若い家畜の肉が最もおいしいと見なしている。
- (6) 身ごもっていない雌馬の肉 キルギス人は身ごもっていない雌馬の肉が最も新鮮で柔らかいと見なしている。
- (7) 王宮攻め キルギス族の民間に伝わっている遊戯で、季節を問わず行われる。
- (8) シルネ キルギス族の伝統的な集いで、毎年およそ七、八月に草原で催される。
- (9) テケテルミシとコルブカ いずれも古代のキルギス族の民間に伝わっていた遊戯。前者は、張りめぐらした縄に跨って一人で引っ張り合い、後者は三、四人で互いに引っ張り合う。
- (10) コムーズ キルギス族の三弦の楽器。民間で広く用いられ、老若男女を問わず、誰でも演奏し、どの家にもそなえられている。

- (11) 口琴 キルギス族の少女が口の中で吹き、手の指ではじく鉄製の楽器。
- (12) 絨毯 毛で織られて糸目のない絨毯
- (13) 揺りかごの儀式 キルギス族が嬰兒を初めて揺りかごに寝かせる時に行う伝統的な儀式
- (14) クルケズ 山中で遊牧する人の意。後にキルギス族の民族名となった。これはキルギス族の起源伝説の一種。